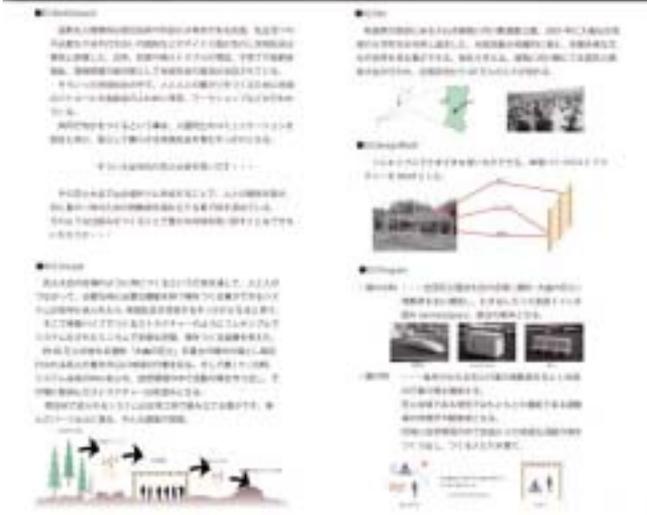
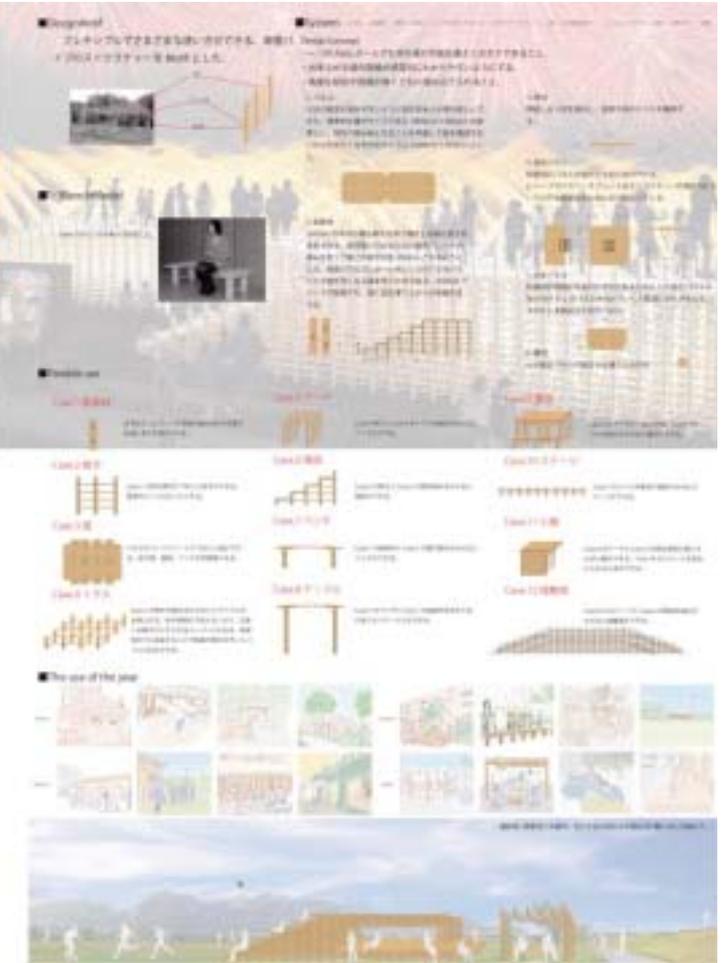


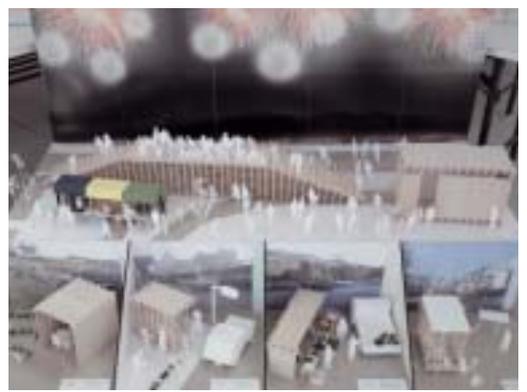


# 可変棧敷 みんなの椅子

多賀谷 祐紀 (たがや ゆうき)  
日本大学 生産工学部 建築工学科



地元秋田県の一晩で60万人が訪れる全国花火競技大会。3大花火大会の一つで毎月花火行事が行われる。地元の人たちが会場の組み立てと解体を行うことで地域コミュニティを形成しており工事現場にある仮設トイレ、単管パイプで作られる棧敷や露店で構成され乱雑な会場になっている。そこで新しい棧敷席を考えた。花火を観る事はもちろん地域の人たちが街の中で組み立て利用できる。花火大会の時は棧敷やサンタリー空間、露店、椅子などとして使われ日常では毎月行われる花火行事を中心に地域の行事を彩る。最小単位ではベンチとして利用され自然環境の中で自由に人の活動の場をつくる事ができる。共につくる事を通して小さなコミュニティが生まれ相互に繋がり合い地域社会が復活、活性する。



### 講評

建築家としての活動の一つに街づくりがある。これはよく言われるが、実際に成功しているケースは数少ない。作者の計画案は単に、組立移動が簡単にできる木製のベンチの提案ではない。地域活動の場面において、誰もが簡単に組み立てられ、利用できる人に優しいベンチの提案である。さらに、素材は地元の山林の間伐材を利用している。

このベンチ（人のモジュールにあつた伝統工法を提案している）を組み立てるまでの工程には、運ぶことや保管することなどの人手が関わっている。こうした工程には運営組織が必要であり、地域のコミュニティが大切だ。ベンチによって地域が結ばれる。ベンチの一つ一つは小さいが、街づくりの契機となれる可能性を秘めている。ベンチが彩る故郷の景色が見えてくるようだ。（審査委員：大岩 義充）